

全校のみなさん、おはようございます。

山は白くなり、こちらでも雪のちらつく日が出てきました。

さて、今年の読書旬間の課題図書は『星の王子さま』でした。その中に「ものごとは心でしか見ることができない。大切なことは目には見えない。」という有名な一節があります。

この言葉が私たちの心に響き、そして考えさせられるのは、普段の私たちが、「目に見えるもの」に心を奪われ、それに執着しているという現実があるからではないでしょうか。

「見える化」という言葉が一時期流行しましたが、あらゆるものを「数値」や「データ」などの「目に見えるもの」にしなれば気が済まない、という心を現代人は持っているように思います。

学校の成績をはじめとして、人の能力や学習内容までも数値化し、データにして、あらゆるものを「目に見えるもの」にしようとしています。

最近では飲食店や学校までもが、ウェブサイトで「点数」が付けられています。動画サイトであれば、再生数やコメント数という「目に見えるもの」が、その動画の価値を決めるものになっているようです。

このように、私たちは数値やデータに一喜一憂し、踊らされているようです。それは、「目に見えるもの」しか信じられない、「目に見えるもの」ではなければ安心できない、という心を私たちがいつの間にか持つてしまつて、数値やデータなどの「目に見えるもの」からしか人間や物事の価値を考えられなくなっているからではないでしょうか。

「目に見えるもの」と言っても、人間の目には限界がありますから、どう頑張つてもすべてを見ることはできず、ある側面からしか見ることができません。しかし、人間は、「自分の目に見えるもの」がすべてだと勘違いして、「自分の目に見えないもの」を大切にできません。このような人間の姿を、親鸞聖人は、今年度の報恩講カードのように「邪見憍慢悪衆生」と表現なさっています。

このような、私たちの「目に見えるもの」への執着を破るのが、「阿弥陀」と表現されている仏さまのはたらきです。「阿弥陀」というのはたらしきを、親鸞聖人は「無量寿」と受けとめられました。これは「はかたりくらべたりすることのできないのち」という意味です。数値やデータにされるよりも前に、もともと私たちが、「はかることのできないのち」を生きているのです。人間の本当の豊かさやよろこびは、目には見えないところにあるはずで

これで朝の法話を終わります。来年からは新役員が務めます。一年間ご清聴ありがとうございました。